

## 企画展示「ドイツと日本を結ぶもの — 日独修好150年の歴史 —」

前号で予告しましたように、鳴門市主催による企画展示「ドイツと日本を結ぶもの—日独修好150年の歴史—」が昨年12月9日（水）から今年の1月24日（日）にかけて開催されました。会場は当館の施設の関係上、1階の大ホールと2階の特別展示室とに分散するという、従来したことがないような変則的な構成になりました。大ホールではほとんどがパネル展示となり、現品及びレプリカは特別展示室に陳列して来館者にご覧いただきました。現品では『ライプチヒ絵入新聞』から徳川幕府の竹内使節団に対するプロイセン国王の謁見場面の挿絵と『パンチ』紙からビゴーの絵を展示し、レプリカとしては外交文書で、とりわけ徳川家茂が竹内使節団に持たせたプロイセン王国への信任状（現物はプロイセン枢密文書館が所蔵）が実物と見まごうばかりのすばらしい物でした。もっと多くの品々を展示したかったのですが、使える展示ケースが少なく、断念せざるを得ませんでした。

当館は正確に言うと「博物館」ではないのですが、「ドイツ」という国名を冠する史料館である以上、日独交流の全体的な流れを俯瞰する企画は有意義なものと考えて本企画展示を提案し



開場式典（テープカット）



内覧会で

ました。そのため市側には何かと負担をかけることになりましたが、その割に来館者数が伸びなかったのが残念でした。ただ、この展示を見るために大阪などからわざわざ来られた方もいたことは、決して無駄な企画ではなかった証であると思っています。

鳴門市ドイツ館独自の展示としては、「板東の捕虜と地域との出会い」をテーマに選択した写真をパネル化して約30枚展示しました。展示に写真を選んだ理由は、ドイツ館が所蔵している写真にはあまり人に知られず、なおかつドイツ人と地元の人との交流を表すものが多くあるからです。また当時のドイツ人が目にした風景や人物などを紹介して、逆に現代の人にかつての日本（といっても鳴門、徳島だけですが）を知ってもらいたい意図もありました。

展示期間中には映画会を2度開催しました。第1回は12月19日にブリギッテ・クラウゼさん制作の「敵が友となるとき／日本のドイツ人捕虜収容所」を、第2回は1月9日で昭和47年に地元の四国放送制作の「板東俘虜収容所」というテレビ放映番組を終日流しました。残念ながら観客はそれほど多くはありませんでしたが、熱心にご覧になっていると感じました。

この企画展では各界からの来賓をお招きして、開場セレモニーおよび内覧会が開催されました。セレモニーでは主催者を

代表して泉鳴門市長、所用で欠席した久留島国立歴史民俗博物館長に代って保谷東京大学資料編纂所教授のほか、来賓の川端徳島県議会議長からのあいさつがあったのち、テープカットとドイツ館周囲のイルミネーションの点灯がなされました。このイルミネーションは企画展開催中のみならず、終了後も少しの間点灯されていました。



ドイツ館前のイルミネーション

## 交流記念プレート設置式 (11月10日(火))

鳴門市ドイツ館が直接関与している行事ではありませんが、日独の学校の交流を記念して両校の生徒によってデザイン・制作された記念プレートの設置式がドイツ館内で開催されましたので、ご紹介しておきます。その両校とは徳島県立徳島科学技術高等学校とニーダーザクセン州オスナブリュックのプリンクシュトラーセ職業学校で、この式典には両校の代表者と生徒が主席したほか、徳島県の熊谷副知事も挨拶されました。このプレートはしばらくの間、ドイツ館内のニーダーザクセン州展示コーナーに置かれて来館者に見ていただいていたのですが、現在は徳島科学技術高校にあるとのことです。



## 鳴門市ドイツ館収蔵品展

これも前号で予告していたものですが、ドイツ館史料研究会による企画展示が本年2月7日(日)から3月27日(日)まで開催されました。前号発行以降にドイツ館資料をユネスコ世界記憶遺産へ登録を目指す動きがにわかに浮上してきたため、企画展の名称を「鳴門市ドイツ館収蔵品展—ユネスコ世界記憶遺産への登録に向けて—」と変更しましたが、展示内容そのものは予定していた物から大きな変動があったわけではありません。

ドイツ館では第一次世界大戦時のドイツ兵捕虜に関する多くの資料を収蔵しています。それらは購入により所蔵するにいたったものも一部ありますが、国内外の多くの方からのご好意で戴いたものが多いのです。収蔵品のうち、特に印刷物については多くを常設展示で来場者に見て頂いているのですが、それは書籍が中心で音楽会や演劇、講演などのパンフレットと配付資料については大半が資料室に保管されたままの状態です。時に専門家の方々やマスコミ関係者に対して閲覧に供することはあっても、ふだん一般の方々には直接目にする機会はありません。ドイツ兵捕虜の制作したすばらしい印刷物を是非見ていただきたく、展示の3分の2以上はこれらの品々とししました。そ

### 鳴門市ドイツ館収蔵品展

—ユネスコ世界記憶遺産への登録に向けて—





第一次世界大戦時の写真やアルバムを初めとして、板東俘虜収容所内で印刷・制作された貴重な品々、元捕虜の所持していたものなど多数の関係資料のうち、常設展で展示していないものを公開します。これらの中には2019年のユネスコ世界記憶遺産への登録を目指す中で検討対象となるものもあります。

他に、板東俘虜収容所とは直接の関係はありませんが、他の収容所や第一次世界大戦後から現代に至るまでの品々もいくつか展示いたします。






超インフレ紙幣 (1億マルク)

開催期間：2月14日(日)～3月27日(日)  
午前9時30分～午後5時(入場は4時30分まで)

休館日：2月22日(月)

会場：鳴門市ドイツ館2階特別展示室

入場料：通常の入館料

主催：ドイツ館史料研究会

後援：徳島新聞社、朝日新聞徳島総局、毎日新聞社徳島支局、読売新聞徳島支局、四国放送、テレビ鳴門、ケーブルテレビ徳島、エイアイテレビ、エフエムびざん





れでも一度に展示できる点数は限られているため、印刷物については会期中で多くを展示替えして対応しました。

これ以外にリューネブルクから戴いた品々のうちチターのほか、特に以前「リューネブルクからの寄贈品展」で紹介しなかったもの、元捕虜のクライさんから戴いた人形など種々の品々も展示しました。



## ユネスコ世界記憶遺産について

徳島県在住の方はご存知かと思いますが、徳島県と鳴門市が共同で板東俘虜収容所資料のユネスコ世界記憶遺産への登録を目指す行動を取ることが新年早々に発表されました。

前もって誤解を防ぐために言っておくと、「世界記憶遺産」は姫路城や富岡製糸場のような「世界遺産」とは全く別のものです。文部科学省のインターネットサイト上の日本ユネスコ国内委員会のウェブページにある記述によれば、「ユネスコ記憶遺産とは、手書き原稿、書籍、ポスター、図画、地図、音楽、写真、映画等の記録遺産を対象として、世界的重要性を有する物件をユネスコが認定・登録する事業」だそうです。

日本では登録数はまだ少なく、一番最初に登録されたのは「山本作兵衛炭坑記録画・記録文書」で、その他「舞鶴への生還 1945～1956シベリア抑留等日本人の本国への引き揚げの記録」など5点のみです。

鳴門市ドイツ館は板東俘虜収容所資料として、書籍や音楽会・演劇などのプログラムパンフレット、絵はがき、講演会配布資料などの印刷物、さらには書簡類や写真など数多く所蔵しています。板東俘虜収容所自体が捕虜の処遇と彼ら自身の活動によって捕虜自身にとって忘れがたい土地になったのみならず、その活動のさまざまな記録が残っています。なおかつ、その遺構が現存する場所があって、それが日本において希有なこと

あり、歴史的に重要な場所であると言えるでしょう。

登録を目指すための具体的な動きとしては、まず以下の5名を委員とする板東俘虜収容所資料調査検討委員会を設置されました。

有馬 学 九州大学名誉教授、福岡市立博物館館長

岩井 正浩 神戸大学名誉教授、徳島県文化財保護審議会委員

栗原 祐司 東京国立博物館総務部長

原田 昌博 鳴門教育大学大学院教授

そして私、川上です。

第1回委員会は3月22日（火）に開催されて、有馬福岡市立博物館館長が委員長に選出されました。具体的な内容は省きますが、2018年申請、2019年登録を目指すということになりました。

なお、委員会で申請候補を提案する資料リストを作成するため、徳島県教育委員会と鳴門市教育委員会の職員3名と私からなる作業部会があって、1月から3月にかけて6回開催されたこともご紹介しておきます。

## 所蔵品紹介

私のはじめて執筆・編集を担当した2007年12月発行の第18号以来、ドイツ館の所蔵する各種資料を紹介してきましたが、ユネスコ世界記憶遺産への登録を目指す書簡類を忘れていましたので、最後にそれを紹介しましょう。

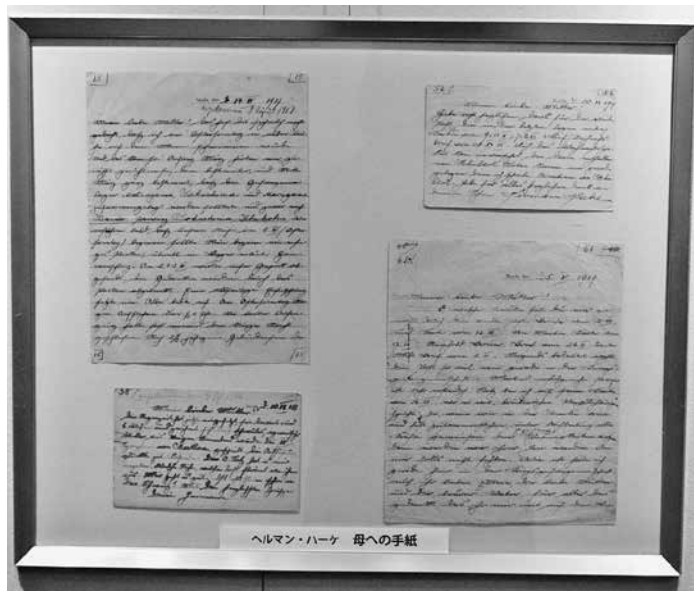
この書簡類は上記の作業部会での集計で18点となっていますが、そのうち書簡集が2件ありますので、実際はもっと点数が多くなります。そのうちもっとも数が多く、なおかつ当時の捕虜の暮しや思想、感情を知る上で重要なものは、ヘルマン・ハーケが主に故国の母に宛てて書いた手紙とハガキです。日本以外の場所から出した手紙も少数含まれますが、ほとんどは捕虜時代のものでそれが80点あり、約半数は松山収容所時代、残りの半数が板東収容所時代のもので、往復書簡ではないので母からの手紙の内容は知れないものの、届いた手紙に対して感謝を述べたり、コメントする内容が書簡中であって、それが推察できる場合もあります。手紙の内容は多彩なため、全体に対する簡単な紹介はしづらいのですが、収容所生活とそれを支援する故国および日本在住のドイツ人との交流がどのようなものであったかがよく分ります。

ここで、ベートーヴェンの「第九」の演奏会について言及している1918年6月10日付の母へのハガキから当該部分を抜書

きしておきます。

「…先週の土曜日にはベートーベンの第9の演奏がありました。演奏は大成功でした。特に第3楽章にはほれほれしました。なんとも言えない安らぎ、慰めが流れ出て来るのです。…」

この演奏会は「第九」の日本（あるいはアジア）初演となるものですが、この演奏会があったこと自体を疑問視する向きも無いではないので、実際に開催されていたことの傍証のひとつとして紹介しておきます。



収蔵品点で展示した手紙とハガキ

## これまでの主な行事

- |            |   |
|------------|---|
| 11月8日      | 第6回 笑っちゃう会                              |
| 11月23日     | 角 泰志コンサート                               |
| 11月29日     | 「女性が輝く 自分らしくいられるまち<br>鳴門の未来」フューチャーセッション |
| 12月19日～20日 | ドイツ館のクリスマスマーケット 2015                    |
| 2月7日       | ハーブコンサート                                |
| 2月21日      | 第9回フリーデンスフェスト                           |
| 3月16日      | Spring Concert                          |
| 3月26日      | ドイツ館のイースターまつり                           |

## 退任のごあいさつ

私こと鳴門市ドイツ館長の川上ですが、この3月末日をもちまして館長職を辞すことになりました。ただ、上で書きました板東俘虜収容所資料をユネスコ世界記憶遺産へ登録を目指す動きの中で作業部会のメンバーとなり、調査検討委員会委員のひとりともなりました。また、鳴門市が計画している「第九」百周年イベントを2年後に控えており、またドイツ館の資料の整理と保存・保管を進める仕事を本格化させることもあり、鳴門市からの要望で引続き来年度も月に何度か鳴門市ドイツ館へ勤務することになりました。

なお新館長には森清治さんが就任します。彼は鳴門市教育委員会で長らく遺跡調査に当たってきた人で、近代化遺産としての板東俘虜収容所の発掘調査で指揮を取り、同僚の下田智隆さんとともに板東俘虜収容所に関する詳細な報告書を作成しています。この報告書は単なる遺跡調査にとどまらず、収容所に暮した捕虜たちの活動についても詳細にまとめてくれているので、便利で私も折にふれ、使わせてもらっています。なお当『ルーエ』誌上でも第19号で、この発掘調査について下田さんに記事を執筆してもらっています。

さて、この館報『ルーエ』の執筆・編集を田村元館長から引継いで、丸9年になります。理系得意のはずが何故か文学部を出た私には文を紡ぎ出すことが苦手で、拙い文章を書連ねてお見苦しいところを見せてきました。けれど時に「楽しみに読んでますよ」との有難い言葉を聞かせていただくことがあり、励みにしておりました。この号をもって担当を下りることになりますので、この場をお借りして読者のみなさまにお礼を申し上げます。退任のあいさつとします。

